

## ➤ 特別後援

【ライフホール 9:40~10:25】

「コロナ禍乗り越え、新たな時代に」

厚生労働大臣 加藤 勝信



新型コロナウイルス感染拡大で痛感したのが、わが国における医療分野のデジタル化の遅れだった。この解決には、医療DXによる健康・医療情報の活用を思い切って進めていくことが必要になる。

政府は昨年10月に総理大臣を本部長とする「医療DX推進本部」を立ち上げ、今年6月には工程表を策定した。

工程表では、2024年度中の電子処方箋の普及、介護保険・予防接種等にかかるマイナンバーカードを利用した情報連携の実現などを図っていくと明記。また、2024年度から標準型電子カルテの開発に着手し、遅くとも2030年には概ね全ての医療機関で必要な患者の医療情報を共有できることを目指すとした。さらに、診療報酬と患者負担の統一的な計算プログラムである共通算定モジュールを開発し、2026年度より本格的に提供することとした。

今後とも国民の理解をいただきながら、歯科技工士の皆様も含む医療界はじめ、産業界とも一丸となり、医療DXの実現に向けてしっかりと取り組んでいく。

## 歯科臨床における歯科技工士の役割 咬合・機能の長期的安定



本多 正明

---

日常臨床における歯科治療の目的は、生理的機能の回復であり、最も重要なことは、術後の良好な状態をどれだけ長く維持できるかである。そして、良好な機能を回復するにあたっての主役を担うのが、補綴治療であることは各分野の先生達も認めるところであろう。補綴治療に際し、補綴装置を製作する歯科技工士が担っている役割は非常に大きく、歯科技工士の技術の貢献なしには補綴治療は終了しない。歯科治療の流れのなかで、補綴治療に至るまでの治療、すなわち初期治療や確定的外科は、機能回復のための補綴治療の前準備のステップと捉えることができる。

今日ではデジタルデンティストリー、特に補綴分野での目覚ましい進歩と共に臨床的に素晴らしい治療結果が、誌上や講演会等で数多く報告されている。

今回は欠損補綴を、固定式のブリッジ、可撤式のパーシャルデンチャーとインプラント補綴に分けて、臨床的に整理する。

欠損歯列に対し補綴治療を施す目的は、機能の回復と審美性の改善であるが、歯科治療において最も重要な目的は術後の長期的安定である。

---

### 【略歴】

1970年 大阪歯科大学卒業

1978年 東大阪市にて本多歯科医院開設

1972年～2003年 Dr.Raymond Kim (南カリフォルニア大学) に師事

2008年 朝日大学歯学部クラウンブリッジ補綴学 非常勤講師

2021年 大阪歯科大学大学院口腔インプラント学講座卒業

大阪歯科大学歯学部口腔インプラント学講座 臨床教授

### 【所属学会】

日本臨床歯科学会 副理事長

日本補綴歯科学会 会員

日本顎咬合学会 終身指導医

日本顎口腔機能学会 会員

口腔インプラント学会 会員

日本口腔リハビリテーション学会 会員

日本臨床歯周病学会 会員

日本審美歯科学会 会員

## セットアップモデルが導く 包括治療のゴール



津田 祐 青木 健治

---

長期的に予知性の高い歯科治療を行う上で、歯牙の位置が重要であり、それを改善するために矯正歯科治療がひとつの選択肢であると考え、その中でも多数の補綴予定歯や欠損が存在するケースにおいては、矯正歯科治療を含む包括治療の対象となる。その中で、治療ゴールのイメージを歯科医師と歯科技工士が共に構築し治療を進めていくことができれば、適正な治療咬合の達成に繋がると考える。しかし、治療のゴールが明確でない場合は、歯科医師と歯科技工士のコミュニケーションツールである診断用セットアップモデルを製作し活用することで、適正な治療咬合が達成するのかを判断することが可能である。

今回は診断に効果的であるセットアップモデル製作時に必要な基礎知識と、さらには歯科医師とコミュニケーションを取るべき項目について、症例を通して説明したい。

---

### ○津田 祐

#### 【略歴】

2008年 徳島大学歯学部卒業

2015年 大阪市開業

#### 【所属・役職】

日本臨床歯科学会大阪支部理事

咬合・補綴治療計画セミナー インストラクター

GPO インストラクター

ITISC 阪神 Codirector

### ○青木 健治

#### 【略歴】

1998年 大阪歯科学院専門学校 卒業

1999年 デンタルコーディネイトセンター 勤務

2008年 本多歯科医院 勤務

2019年 LORE dental laboratory 開設

#### 【所属・役職】

大阪 S.J.C.D 臨床テクニシャンコース インストラクター

新大阪歯科技工士専門学校 専攻科非常勤講師

日本臨床歯科学会 大阪支部 会員

大阪セラミックトレーニングセンター 週末コースインストラクター

## 「機能する口に整える」



山下 政代

---

我が国は超高齢社会にすでに突入している。そのため、高齢期歯科保健も 8020 運動に代表される「歯数維持」に加え、「口腔の機能低下予防」を主眼とした内容となった。平成 26(2014)年からは 75 歳以上を対象とした後期高齢者医療歯科健康診査（歯周病を起因とする細菌性心内膜炎・動脈硬化症等の悪化，口腔機能低下による嚥下性肺炎等を予防するための歯科健診）が実施されている。高齢者に対する公的な口腔保健活動が広がる中，オーラルフレイルの概念が提唱され，平成 30(2018)年には口腔機能低下症が歯科医療保険に新規収載された。これにより，口腔機能低下予防の取り組みが進んでいる。口腔機能を回復するために不可欠な義歯を必要とする患者は様々な年代や状態にあり，オーラルフレイルから口腔機能低下症，そして口腔機能障害までそれぞれの口腔機能に応じた歯科的アプローチが必要とされる。歯科衛生士として機能する口に整えるためにおこなっている取り組みについて紹介したい。

---

### 【略歴】

1975 年 大阪府歯科医師会附属歯科衛生士専門学校 卒業

2002 年 日本福祉大学 経営学部 医療・福祉マネジメント学科 卒業

歯科衛生士資格取得後，歯科臨床に携わると同時に，健康教室・介護予防教室・健康展など地域歯科保健活動，病院・施設の口腔健康管理や機能療法に出務，また，歯科衛生士養成校において後進育成・病院・施設・企業の職員研修等で講師を務める。その他 2005 年から 10 年間居宅介護支援センターでケアマネージャーとして勤務の経験がある。

### 【所属・勤務先】

公益社団法人 大阪府歯科衛生士会 訪問口腔健康管理アドバイザー

三好歯科医院

豊中市在宅歯科ケアステーション コーディネーター

### 【所属学会】

日本歯科衛生士学会

日本歯科医療管理学会

日本老年歯科学会

### 【認定資格】

日本歯科衛生士会認定歯科衛生士 認定分野 在宅療養指導・口腔機能

日本歯科衛生士会認定歯科衛生士 認定分野 摂食嚥下リハビリテーション

日本歯科衛生士会認定歯科衛生士 認定分野 研修指導者・臨床実施指導者



## 歯科衛生士と歯科技工士が行う 情報共有の重要性



小松原 夕香



井上 陽介

---

歯科技工士が補綴装置を製作する際、清掃性を考慮した形態を付与しなければならないことは周知されている。また、清掃性の高い形態についての基本的な考えは、多くの講習会や文献、誌面等で確認することができる。しかし実際の臨床の間では、個人差のある口腔内環境を見定め、その条件によって変化させる必要があることから、正解を導くのは困難であると思われる。そこで基本的には歯科医師とのディスカッションの上、適正な形態を決定する必要があるものの十分とはいえない。

患者個々の詳細な情報は、清掃器具の使用状況などを含め歯科衛生士が最も把握している。そのことから、歯科衛生士とディスカッションすることにより多くの情報が得られ、口腔内に調和する補綴装置製作に繋がるのではないかと考える。

そこで今回、歯科衛生士と歯科技工士がどのような情報の共有を行い補綴装置の製作をおこなっているのかを臨床例を用い解説したい。

---

### ○小松原 夕香

#### 【略歴】

2003年 大阪産業大学附属歯科衛生士学院専門学校 卒業

2003年 医療法人 浦野歯科診療所 勤務

2009年 日本臨床歯周病学会認定歯科衛生士 取得

### ○井上 陽介

#### 【略歴】

2005年 岐阜県立衛生専門学校歯科技工士学科 卒業

2006年 Institute Dental Technology of California 卒業

2006年 AuCeram 勤務

2007年 有限会社ファイン 勤務

2012年 松川歯科医院 勤務

2017年 IEDITION 設立

#### 【所属・役職】

大阪 S.J.C.D 臨床テクニシャンコース インストラクター

新大阪歯科技工専門学校 専攻科非常勤講師

日本臨床歯科学会 大阪支部 会員

## Denture Treatment に必要な 歯科技工士のスキルと役割 (総義歯からの多数歯欠損症例の捉え方)



今西 秀郷

---

超高齢化社会が進む日本において、Denture Treatment は非常に重要な補綴治療であるとともに、その重要性は今後ますます増加するものと思われる。しかし、義歯は院外技工にて製作されることにより、Denture Technician がチェアサイドでの工程や治療等を詳細に理解することが困難である。そのため、機能および審美性において患者の満足を得られる義歯を製作することは非常に難易度が高く難しいと思われる。このように、診療所と歯科技工所間でのコミュニケーションが充分に取れていないのだろうと推測する。これは義歯治療だけに限らず補綴治療全般にいえることであり、特に総義歯を含めた多数歯欠損症例の場合、診療室とのコミュニケーションは最終補綴のゴールの指標となることを総義歯にフォーカスしてその重要性をお話したい。

---

### 【略歴】

1996年 大阪歯科大学歯科技工士専門学校卒業  
1996年 ADL  
2000年 イーストデンタルラボ  
2011年 Zeal ism 開業

### 【所属】

京都府歯科技工士会  
KSI アドバンスメンバー  
SDR  
歯庵  
IFAA  
日本顎咬合学会 認定技工士

## MY Shooting Style



瓜坂 達也

---

昨今、デジタル機器の普及により口腔内画像を比較的簡単に得られるようになった。それに伴い従来と比較して色調に対する要求も高まっている。歯科技工士（以下、術者）は使用する材料の色調特性の理解はもとより、患者のニーズや求められる色調についての具体的情報をいかに精度高く収集できるかがポイントになっている。

現在の色調に関する具体的情報源は、シェードガイドと共に撮影されたシェードセレクション時の画像が主である。しかしチェアサイドから技工サイドに届く画像について、色調再現がしやすいとは必ずしも思えないことも事実である。またチェアサイドでは、口腔内撮影法をはじめとするカメラの予備知識についての習得が困難である傾向にあると思われる。そのため、シェードセレクション時の口腔内撮影全体を術者に依存される場合が多いと思う。

そこで今回、口腔内撮影に特化したデジタル一眼レフカメラの基礎知識を紹介する。

---

### 【略歴】

1997年 島根県歯科技術専門学校歯科技工士科 卒業

1998年 早稲田歯科技工トレーニングセンター 16期デイクラス修了

1998年 (株) ケイテックス 入社

1999年 歯科医院技工所 勤務

2001年 大阪セラミックトレーニングセンター 16期週末コース修了

2005年 (株) 松風 The Next Generation Ceramics Technical contest 入賞

2008年 あさの塾 5期修了 同最優秀賞受賞

2008年 LUCENT Dental Laboratory 開業

2010年 KUWATA College 110期修了

2013年 にしむら塾 大阪5期修了

(株) 松風アドバイザー

新大阪歯科技工士専門学校専攻科非常勤講師

デンタルアカデミー東京非常勤講師

## 「デジタル時代にこそ知っておきたい パーシャルデンチャー7つの構成要素」



大澤 浩史

---

近年、歯科治療において、多岐にわたるデジタル技術が進化し普及していることは誰もが知るところである。当初はラボスキャナーの出現によりジルコニアの台頭、続いて CAD/CAM 冠の保険導入が実現し、最近では歯科医院による IOS（口腔内スキャナー）の導入等、デジタルは日々進化を遂げている。

しかし、パーシャルデンチャーにおいてはクラウンやブリッジと比較してもメタルフレームをはじめとする構成要素が多いため、デジタル化は非常に困難であると思われる。パーシャルデンチャー製作の完全デジタル化はまだまだ先がみえない状況ではあるものの、デジタル技術は日々進化していることである。しかし、ツールや材料が異なるとしても、「パーシャルデンチャーの基本概念」はアナログ時のものと何も変わらないと考える。

そこで今回、機能するパーシャルデンチャーを目指して基本概念と必要不可欠な7つの構成要素について考察していきたい。

---

### 【略歴】

- 1997年 香川県歯科技術専門学校 技工科（現 香川県歯科医療専門学校）卒業
- 2000年 香川県歯科技術専門学校 技工科 非常勤講師
- 2006年 歯科技工 二葉商会 開業
- 2016年 K.S.I. Basic Course 受講
- 2017年 K.S.I. Advanced Course 受講
- 2022年 咬合・補綴治療計画セミナー受講
- 2022年 二葉商会株式会社組織変更

## ～パーシャルデンチャーでの対応～

### “欠損歯列に対し機能させるための着目点”



奥森 健史

---

歯科技工のデジタル化が日々進歩をしていることは疑う余地もない。そのような中、デンチャー製作のデジタル化はまだ研究・開発の途中であると思われる。特にパーシャルデンチャーはさまざまな欠損状態にあり、さらに患者可撤性装置という“限られた条件下”にあるため、ポテンシャルを発揮することを演者は常に考え臨床に携わっている。また日々進化する各マテリアルに対するテクニシヤンの考え方は、そのリスクとベネフィットを見極めるための多くの知識が必要である。また、見た目のデザインだけを追い求め、その製作手順だけにこだわるのではなく、完成されたパーシャルデンチャーの経年変化を想定しながら対応していくことはとても重要だと考える。

本講演では、パーシャルデンチャーにおける各構成要件の機能について、ラボワークからの視点で各ケースについてステップごとの着目点を解説したい。

---

#### 【略歴】

1984年 東洋歯科技工学院

1992年 渡独 ドイツ {プフォルツハイム}

2000年 有限会社 デンタル・プログレッシブ開設・・・現在に至る

代表 奥森健史 咬合・補綴治療計画セミナー インストラクター

大阪大学歯学部 歯科技工スーパーバイザー

デントウラム社 {ドイツ・プフォルツハイム} 公認インストラクター

日本歯科技工士会 認定講師

古希の会 メンバー

大阪S J C D 会員

スタディーグループK S I 主幹

## これから始めるオールセラミックス



小出 俊介

---

昨今のセラミック修復といえば、ジルコニアもしくは二ケイ酸リチウムを応用したオールセラミックスが主流になりつつある。これにより、これまでおこなわれてきたメタルセラミックスのような煩雑なテクニックを必要としないモノリシックやマイクロレイヤリングなど、比較的簡便なテクニックによって臨床的に十分な色調を再現することが可能となった。しかし、何も理解しないまま誰もが簡単に操作できることはなく、材料特性を十分理解した上で最低限の形態再現能力は必要であると考え

る。

以上のことから今回の講演において、これから始めようとしている術者に対して解できるように、オールセラミックスの基礎的知識をベースに、その使用方法を演者の臨床経験から考察し、解説してみたいと思う。

---

### 【略歴】

2003年 滋賀県歯科技工士専門学校専攻科 卒業

2003年 パイオニアデント入社

2007年 大手前歯科診療所（ベルデンタルラボ）入社

2011年 nagomi Dental Laboratory 入社

2013年 HAMMY 入社

2018年 T`s Factory 開設

2011年 吉田塾5期終了

2012年 大阪セラミックトレーニングセンター週末コース28期終了

2013年 大阪SJCD テクニシャンコース17期終了

2018年 Clinical Enhancement Course 1期終了

GC initial instructor

## 『アナログ&デジタル技工の先にあるもの』



新町 愛子

---

現在、歯科治療において、CAD/CAM 技術を応用した補綴装置の製作におけるデジタル化が急速に進んでいる。しかし一方では、義歯のようにまだまだデジタル化が困難であるとされる分野や、そもそもデジタル化が困難である症例も存在する。そのため、デジタル化が進む中で、それを応用できないものに関してはアナログ技工を用いなければいけない。

そこで本講演では、演者の臨床例を提示し、補綴装置の製作においてどのようにアナログとデジタルを活用しているのか紹介する。また、アナログ技工の知識と経験が減少するこれからの世代に対して、どのようにしてアナログ技術を伝承していくべきかについて述べ、歯科技工士が向かうべき今後の方向性を皆さんと共に考える機会となれば幸いである。

---

### 【略歴】

- 2005年 新大阪歯科技工士専門学校 卒業
- 2005年 和田精密歯研株式会社
- 2013年 医療法人 翔己会 かい歯科 院内歯科技工士
- 2018年 和田精密歯研株式会社
- 2023年 株式会社パーソナルシステム S.B.Labo



## これからの CAD/CAM に求められる デジタルリテラシー



武田 航

---

2014年のCAD/CAM冠の保険収載を機に、歯科技工でのデジタル化が一気に加速した。さらに現在では、口腔内スキャナー“IOS”がチェアサイドに導入されることにより、歯科業界全体でデジタル化が急速に進んでいる。CAD/CAM市場が導入期を終え成長期に入っている今、大きな変化をもたらしているのがIOSである。これを活用した歯科治療・技工作業の極めて著しい変化は、多くの人が否定できないことだと思う。このデジタル化への変化に伴い、それに求められる知識および技能も変化しており、“スキャンニング・デザイン・CAM・加工/造形等”，それぞれで求められる知識および技能を習得しなければより良い補綴装置の製作や、ワークフローの効率化・歩留まりの低下につながらない。

そこで今回モデルレスでのIOSケースを含め、これからCAD/CAMを活用しDX化するために必要な取り組み・知識を紹介したい。

---

### 【略歴】

2006年4月 パナソニック デンタル株式会社 入社  
2009年10月 パナソニック株式会社 出向  
2014年4月 株式会社 LAZARUS 入社  
2015年1月 株式会社 Johnny's Factory 設立  
2015年4月 新大阪歯科技工士専門学校 入学  
2018年3月 新大阪歯科技工士専門学校 卒業  
2018年3月 歯科技工士免許取得  
2022年4月 株式会社 Dental Next 設立

### 【所属】

(一社) 日本デジタル歯科学会 会員  
(公社) 日本歯科技工士会 会員  
(一社) 大阪府歯科技工士会 中央北支部 所属  
(一社) 日本歯科技工所協会 加盟  
ILSC 即時荷重研究会 会員  
日本顎咬合学会 会員

## 「アナログからデジタルへの パラダイムシフトと我々の存在価値」



辻 貴裕

---

スマートフォンの出現によって人々の生活を一変させた。歯科業界においても口腔内スキャナーが出現したことによって、従来の印象採得がデジタルデータに変わり、そのことによって AI によるデザインサービスが徐々に浸透することが予想される。加えて今後さらにデジタルによる技工精度は向上していくであろう。まさに今、歯科技工士としてのあり方がテクノロジーの進化によって大きく変わろうとしているのではないだろうか。

この不確実な時代において、歯科技工士としての働き方、場所および費やす時間などの環境変化が起こっている。これらを今後どのように対応していくべきなのか、またデータとデジタル技術を活用した歯科医療の現状と近未来を考察したい。

---

### 【略歴】

1991年 旭川歯科学院専門学校 卒業

2010年 dental BiOVISION 株式会社設立 代表取締役

2021年 デジタル.フォーメーション株式会社設立 代表取締役

### 【所属団体、資格等】

日本口腔インプラント学会 認定専門歯科技工士

日本歯科技工学会 認定士

日本歯科技工士会 生涯研修認定講師

国際口腔インプラント学会 認定歯科技工士(Implant Special Dental Technician)

新大阪歯科技工士専門学校 非常勤講師

OJ (Osseointegration Study Club of Japan)正会員

3Shape Global Key Opinion Leader

## 情報収集ツールとしての プロビジョナルデンチャーの重要性



西原 徹

欠損歯列におけるパーシャルデンチャーの機能や維持安定のためには、多くの口腔内の情報が必要である。しかし一般的にラボサイドでは、口腔内の情報の多くが模型でしか得られないことで限界がある。そのため、模型では得ることのできない口腔内の情報を得るためには、チェアサイドと情報共有が重要であると思われる。演者は日頃の臨床において、その情報共有のためにプロビジョナルデンチャーを活用している。つまり、初期治療から最終補綴装置を製作するまでの各ステージにおける目的の不安要素や問題点を抽出し、それらを改善するためにプロビジョナルデンチャーの形態を生体に適合するように変化させ、より適切な機能や維持安定をファイナルデンチャーへ移行させることである。

今回は、プロビジョナルデンチャーの目的や構成などの基礎概念を提示したあと、その役割および設計基準等を日常の臨床ケースを示し解説していく。

---

### 【略歴】

スタディグループ k.s.i 理事

2008年 新大阪歯科技工士専門学校 卒業

2008年 アリダ・デンタルアート 入社

2013年 k.s.i ベーシックコース 受講

2014年 有限会社デンタル・プログレッシブ 入社

## デジタルデザインにおける 咬合面形態の考え方



長谷川 篤史

---

Chat GPTやZ世代などデジタル化に付随した単語が一般的になっているが、歯科界においてもデジタルライゼーションが拡散している現状がある。しかし、補綴装置の製作における目標はアナログやデジタルに関係なく、口腔内への調和・既存の機能を阻害せず生体に組み込まれることである。そのためには下顎運動ならびに歯の解剖学形態を理解する必要があると考える。その上で、オクルージョンというきわめて多様性の高い分野での知識や技術を習得する必要がある。しかし、習得するプロセスもこれまでとは異なり、バーチャル咬合器などのようにデジタル化され、咬合面形態の可視化などへ移行していくものと思われ、同時に若い層で形成される、いわゆるZ世代の歯科技工士像は、これまでとは大きく異なったものとなることが予想される。

今回オクルージョンという分野について、デジタル・アナログを併用し説明することで、明日からの補綴装置製作に役に立てれば幸いである。

---

### 【略歴】

ORGAN DENTAL LAB 代表

1996年 共生会歯科技工専門学校 卒業

1998年 神奈川歯科大学付属歯科技工士専門学校専攻科 卒業

1998年 (有)榊原デンタルラボ 入社

2008年 Organ Dental Lab 開業

2012年 Diter Schulz 氏に師事

## 『インプラント埋入ポジションの重要性』



林 豊

---

演者は、日々の臨床においてインプラントの補綴装置を製作している。歯科技工所に届く印象体のほとんどは、すでにインプラント体が埋入された状態での症例が多いことを経験している。我々歯科技工士は届いた印象体から患者にとって最良な補綴装置を提供する義務があるものの、インプラント埋入の方向や位置等は歯科医師のみによって判断されている。すなわち、補綴装置を製作する歯科技工士の意見は、そこにはほとんど反映されていないことが多い。しかしインプラント治療でより良い結果を得るためには、歯科医師と歯科技工士が双方のプロとしての仕事を把握しながら共通の認識を持ち、治療のゴールを共有することが重要であると認識している。

そこで本講演では、インプラントの埋入ポジションによる補綴装置に与える影響について、日々の症例を示しながら解説したい。

---

### 【略歴】

- 2007年3月 新大阪歯科技工士専門学校卒業
- 2007年4月 (有)ネクサスデンタルラボラトリー入社
- 2011年4月 医療法人成和歯科 千里ペリオインプラントセンター入職
- 2015年1月 株式会社 LAZARUS 入社
- 2021年6月 BOZU dental laboratory 開設

### 【所属】

- 即時荷重研究会 会員
- 日本口腔インプラント学会 会員
- 日本臨床歯科学会 大阪支部 会員
- 新大阪歯科技工士専門学校 非常勤講師

## デジタル技工の本質



藤松 剛

---

技工操作でデジタルに置換できる工程に関しては、技工作业時間が短縮されることで大きな利点となるとともに日常臨床が大きく変化する。デジタル機器は全てにおいて万能ではないものの、ツールとして適正に扱うことでその機能が発揮される。しかし逆に考えれば、各機器が持つ独自の知識を理解しないと、そのポテンシャルを最大限に発揮することは難しいと考えている。

一方、近年のデジタルツールの急激な進化に伴い、各機器に関する情報が多岐に及んでいるため、歯科クリニックや歯科技工所において、導入を検討している設備に対しての選択基準、ならびにその活用方法の判断基準が不明分であるのと同時に、各機器の知識の習得なしには難しいと考えている。

そこで、本講演では実際の技工作业におけるデジタルワークフローをベースとして、デジタル技工の本質について解説したい。

---

### 【略歴】

1998年 新大阪歯科技工士専門学校 専攻科 卒業

2003年 STF Dental Service 開業

2012年 株式会社 S.T.F Kyoto 設立

2020年 株式会社 S.T.F Tokyo 設立

2022年 株式会社 S.T.F Digital Transformation Center 設立

straumann 社 CARES Instructor CM 社

Pekkton Instructor

3shape社 LAB Ambassador

3shape 社 Global KOL

RAY Global Digital Dentistry Adviser

Imago Works Adviser & KOL

新大阪歯科技工士専門学校専攻科 非常勤講師

## 身体に調和した噛める技工装置を作る

～シークエンシャルオクルージョンの補綴設計コンセプト～



前川 泰一

---

歯科技工士が補綴装置を製作する上で押さえておくべき項目は、美（形体の模倣、色調の一致）と咬合（噛み合わせ）であり、その両者をバランスよく満たすことにより、最適な治療となる。また、近年の歯科業界全体のデジタル化への変化は顕著であり、AIの進歩によって補綴装置の製作方法が大きく変化しようとしている。しかし、歯科技工士の領域である技工装置を最終的に製作するためには、我々の手作業によるところが大きく、わずか数ミクロンの調整で体の機能が回復する事例もよく耳にするように、咬合は特に重要だと考える。

本日は、その両者のうち咬合に特化し、機能を回復する事を目標とした「シークエンシャルオクルージョン」のコンセプトをお伝えし、患者個々の噛み合わせに合った補綴設計、補綴装置製作法を説明させていただき、この発表がこれからの技工人生の1つの指針になればと思っている。

---

### 【略歴】

- 1995年 前川デンタルラボラトリー開業
- 1998年 JIADS 修了
- 2003年 Sequential occlusion Wax-up コース修了
- 2005年 Sequential occlusion Dr コース修了
- 2006年 S.J.C.D テクニシャンコース修了
- 2006年 ICOI (国際インプラント学会) FELLOW 取得
- 2006年 歯然の会 ベーシックコース、アドバンスコース修了
- 2008年 (株)前川デンタルラボ新設
- 2008年 Advanced Total Diagnosis Course 修了
- 2009年 USC ジャパンプログラム (ロサンゼルス) 修了
- 2009年 Oral Design OSAKA コース 修了
- 2011年 大阪セラミックトレーニングセンター宮崎校 入学
- 2012年 同校 卒業 西村賞受賞
- 2013年 BPS 認定コース修了
- 2015年 筒井塾 歯冠修復コース修了
- 2015年 Dieter Schulz wax-up course (ドイツ ヘッペンハイム) 修了

大阪セラミックトレーニングセンター宮崎校同窓会関西支部長

ICOI (国際口腔インプラント学会) 技工部委員長

日本顎咬合学会 常任理事 指導歯科技工士 技工士部会部長



## 仲間と共に北海道の地でパラダイムシフトに挑む 機能する欠損補綴装置を目指して

～特殊維持機構を活用して～



三浦 知也

---

演者は以前、欠損歯列に対する補綴設計をこれまで得た経験値だけに基づいて考え、それに則って補綴装置を製作していた。そのような中、製作した補綴装置の設計において、そこに到った「根拠・理由」を的確に説明することができないことに気が付き、自身の未熟さを痛感するようになった。そこから、自身に改善が必要だと考え、社内スタッフに相談することで、患者の顔（表情）や主訴、チェアサイドで繰り広げられている治療や欠損に至った経緯・背景等の情報が欠落していたことが原因であると結論付けた。また、テクニシャンからだけでなく、ドクターおよびハイジニストから学ぶことで大きな転機を経たことから、チェアサイドとラボサイドが共に協力していくことの重要性を学んだ。

本講演では、演者の今に至る経緯とともに日常を交えながら、機能する補綴装置を製作するための要点をみなさんと共に学び合えればと考える。

---

### 【略歴】

- 2006年 北海道歯科技術専門学校 附属研究科 入学  
株式会社プライムデンタル インターンシップ
- 2007年 北海道歯科技術専門学校 附属研究科 卒業  
株式会社プライムデンタル 入社
- 2023年 日本歯科技工士会認定講師

## 天然歯の形態学（次世代への継承）



脇田 太裕

---

人間の感性は人によって異なり、平均的であれば良いとは限らず、審美技工は「美しい、調和、自然観」を表現することは正に、「感性に触れる」である。

天然歯の形態はその大きい部分を占めている。形態による色調への相乗効果は言うまでもない。製作工程がデジタルになったとしても、最後には補綴装置が存在し、そこから完成までに何ができるか、何をするかによってその価値は大きく変わる。本編は前歯全体の形態の特徴をバランスや流れから「美しさ、調和、流れ」を紹介し自然観を再現するための知識と方法をご紹介します。患者を笑顔にする一助なることを切に願う。（医歯薬出版 天然歯の形態学2 序文より引用）

---

### 【略歴】

1966年11月生まれ

1988年3月 大阪歯科学院夜間学科卒

1989年3月 大阪セラミックトレーニングセンター卒

同年5月渡独 Labor Weiss 勤務

1991年5月帰国 同年6月 大阪セラミックトレーニングセンターインストラクター就任

同年 名越歯科 高槻診療所勤務

1995年 名越歯科 梅田診療所勤務

2001年3月 名越歯科 退社

同年5月 D.デンタルセラミスト開業

2023年2月 大阪 SJCD 臨床テクニシャンコース修了

### 【所属】

D.デンタルセラミスト代表

大阪セラミックトレーニングセンター大阪校 校長

Ivoclar vivadent Japan C&B インストラクター

日本顎咬合学会 会員

日本臨床歯科学会 会員

### 【著書】

2014年7月 『歯牙形態』ZERO publicshing

監修 片岡繁夫 著 脇田太裕

2018年9月 『天然歯の形態学1 Basic』 医歯薬出版

2019年10月 『天然歯の形態学2 Advance』 医歯薬出版

## 組織ラボの経営

日本歯科技工所協会 西支部



藤井 悠介



島 隆寛



和田 主実

歯科医療における補綴を支える歯科技工は、従来から労働環境の改善は課題の1つである。歯科技工所の形態としては、約8割を占める“歯科技工士が1人の歯科技工所”から“複数の歯科技工士が在籍する組織ラボ”と、雇用も含めてさまざまである。昨今、少子化と共に歯科技工士の成り手も少なくなり将来的な供給が危惧されている。かたや需要は高齢化により2040年ごろまで歯科技工製品を必要とする高齢者人口は増加する傾向にある。国民の歯科医療を守るためにも労働環境の改善は急務であり、日本歯科技工所協会西支部メンバーが取り組んでいる3つの事例を供覧し、これからの歯科技工界の一助となれば幸いである。

### 1. 歯科技工士と労働環境 –労働基準監督署の是正勧告を経て–

(株)フジ.デンタルラボ 代表取締役 藤井 悠介

#### 【略歴】

2006年 東洋大学経営学部 卒業  
2007年 若越印刷(株) 入社  
2008年 若越印刷(株) 退職  
2008年 (株)フジ.デンタルラボ 入社  
2011年 同社 取締役 就任  
2018年 同社 代表取締役 就任

### 2. 値決めは経営!! どうやって価格を決めていますか?

#### 知っておきたい経営の基礎知識

(株)シケン 代表取締役社長 島 隆寛

#### 【略歴】

1999年 早稲田大学法学部 卒業  
1999年 第一勧業銀行(現みずほ銀行) 入行  
2001年 同行 退職  
2001年 (株)シケン 入社 取締役就任  
2002年 同社 常務取締役 就任  
2003年 同社 代表取締役社長 就任  
2003年 (株)クエスト 代表取締役社長 就任  
2022年 (一社)日本歯科技工所協会 本部経営理事 就任

---

### 3. 組織ラボにおける歯科技工士の離職率

和田精密歯研（株）代表取締役社長 和田 主実

#### 【略歴】

1986年 行岡医学技術専門学校歯科技工科 卒業

1987年 関西大学社会学部 卒業

1988年 和田精密歯研（株） 入社

1989年～1990年 上海第二医科大学(現上海交通大学)

口腔医学院 研修

2007年 和田精密歯研（株） 代表取締役社長 就任

## 臨床技工におけるデジタルソリューションの活用と ワークライフバランスの改善



稲田 純也

---

近年のデジタル化に付して、臨床技工のデジタル化も急速に進んでいる。そのような状況下で、当社においても CAD /CAM・3Dプリンターの導入がなされ、さらに IOS・模型レス技工など新しい作業が増加傾向にある。それに加え、既存のアナログ技工にもデジタルソリューションを導入することにより作業の効率化や業務の時短化が実現しワークライフバランスの改善に繋がった。そこで本講演では、デジタルソリューションを活用することにより効率化した臨床技工作業について、症例ケースを交えて紹介する。

---

### 【略歴】

2014年 宝塚造形芸術大学卒業

2016年 新大阪歯科技工士専門学校卒業

2017年 新大阪歯科技工士専門学校専攻科修了

LUCENT Dental Laboratory 勤務

2018年 QDT テクニカルコンテスト 優良賞受賞

2020年 大阪セラミックトレーニングセンター修了週末36期 西村賞受賞

2023年 SJCD 臨床テクニシャンコース修了26期 優秀賞受賞

『すぐできる、

ラボ内での口腔内スキャナー活用法』



泉 慶亮

---

歯科技工業界におけるもデジタル化の定着により、その恩恵は計り知れないものがある。さらに、口腔内スキャナー（以下IOS）を用いたデジタル印象採得が一般化することで、加速度的に生産効率を上げると予想される。しかし現状に目を移すとまだまだ石膏模型を用いた技工作業が主流である。そこで、歯科技工の一環として用いたIOSによる時短製作方法、つまり模型分割やトリミングを不要とするCAD/CAM冠の制作方法であるスマート法<sup>注1</sup>を試み、そこから得たIOS導入時の選定から模型スキニングの要点、さらにはスマート法に不向きな症例なども含め発表する。

参考：

注1) 藤原芳生「月刊歯科技工 特集 歯科技工所にIOSが必要な理由」,医歯薬出版株式会社,2022年9月,836ページ

---

【略歴】

2002年3月 広島県立宮島工業高等学校 卒業

2008年9月 有限会社 奈良デンタルタイコニウム 入社

2018年3月 新大阪歯科技工士専門学校 夜間部 卒業

2020年4月 同社 代表取締役就任 現在に至る

## デジタル技術を活用した審美歯科治療



久津輪 正志

---

デジタル技術の発展により歯科治療や補綴物の設計、製造、評価などを従来の手作業に比べてより正確で効率的な方法が確立されつつある。

審美歯科技工には、歯科医師との綿密なコミュニケーションと正確な色調の確認が必要と考える。

デジタルデータは保存や共有も容易であり、歯科医師や患者とのコミュニケーションもスムーズに行うことができる。

また、デジタルデータの使用により、審美的な補綴装置のデザインや色調を詳細に調整することが可能である。

今回は、私が審美補綴についてどのようなやり方を利用してアプローチしているかを症例を通して発表していく。

---

### 【略歴】

2009年 歯科医師会立鹿児島歯科学院専門学校 卒業

2010年 大阪セラミックストレーニングセンター 卒業

2011年 自費専門ラボ 就職

2013年 SJCD テクニシャンコース 卒業

2014年 心斎橋デンタルクリニック 就職